
 シンポジウム

内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）の人体影響について

—関連が疑われる疾患を中心に—

Adverse Health Effects of Endocrine Disrupting Chemicals

第 588 回新潟医学会

日 時 平成 15 年 4 月 19 日（土）

場 所 新潟大学医学部 有壬記念館

司 会 山本正治（衛生学）

演 者 中平浩人（衛生学）、高桑好一（産婦人科）、若月俊二（泌尿器科）、平山 哲（内一内科）、
田中正美（西新潟中央病院神経内科）

発言者 小田信彦（竹山病院）

司会 ただ今からシンポジウム「内分泌攪乱化学物質の人体影響について」をはじめます。なぜ新潟医学会でこのテーマか、ということについて私から説明します。新潟県外から専門家の先生をお呼びして特別講演というのも一つのやり方ですが、今回新潟の関係者でこの問題をどう考えるかということ、勉強会も兼ねて行いたいということで、企画しました。特にこのシンポジウムでは、臨床の先生方が日常の臨床で扱う疾患の原因として、いわゆる環境ホルモンがどう関わっているのかということ、見てみたいという背景があります。もう一つの理由は、いわゆる環境ホルモンと関係があると疑われている疾患ですが、その因果関係についてはっきりしたものは、特にヒトでは一つもないと言っても過言ではないと思います。例えば代表的なケースとしては、スカケベッグが人の精子の数が最近減少しているというようなことを報告しておりますが、一つの問題提起としては非常に興味ある報告ですが、そのことが科学的に真実かどうかというのはまだ結論が出ておりません。日本でもいろいろと研究が進んでおります。その一つのエピソードですが、札幌駅前前でボランティアを対象に精子の提

供を受けて精子を調べたのですが、あまり精子数に変化はないという答だったようです。その背景事情としては、ボランティアとして精子提供をした名もない方々にリピーターが多かったというようなことが言われております。因果関係を考える際に、いろんな社会・経済的な要因、疫学的には交絡因子と言っておりますけれども、そういったものを考えた上で、いわゆる環境ホルモンとの因果関係を考慮すべきであるということです。それからもう一つは、環境ホルモンについては従来の毒理学の基本的考え方である、量一反応関係が当てはまらないといわれています。非常に少量でもって異常をきたすというようなことが疑われておりますが、本当でしょうか。今日の先生方には色々な問題を提起していただき、今後どうすればよいかということについて、お考えいただければと思っております。ちょっと前置きが長くなりましたが、今日は5人の先生方においでいただいております。まず衛生学の中平先生には、現状と問題点についてお話しいただきます。その次に、産婦人科の高桑先生には生殖異常との関連、次に泌尿器科の若月先生には、泌尿器科領域における問題として、腫瘍との関係につい

てお話しいただきます。それから第一内科の平山先生には甲状腺との関わりについて紹介いただきます。最後に西新潟中央病院の神経内科の田中先生には神経との関わりについてお話いただく予定であります。ところで、私はいま環境ホルモンという名称を使いましたが、正式には内分泌攪乱化学物質という方が正しいのです。しか

し言いやすいということで、医学的には間違った表現ですが、環境ホルモンということにさせていただきました。演者の方には、おそらく両方出てくるのではと思いますが、そこは同じものであることをご理解の上、お聞きいただきたいと思います。では中平先生から、研究の現状と問題点についてお願いします。

1 人体影響に関する研究の現状と問題点

中平 浩人

新潟大学大学院医歯学総合研究科
地域予防医学講座 社会・環境医学分野

Recent Epidemiological Evidence for the Adverse Health Effects of Endocrine Disrupting Chemicals

Hiroto NAKADAIRA

*Division of Social and Environmental Medicine
Department of Community Preventive Medicine
Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences*

Abstract

More than six years has passed since endocrine disrupting chemicals (EDCs) became one of great scientific and social concerns. Up to the present, however, little is known whether there is a causal association between a serious adverse effect on human health and exposure to an EDC. WHO has concluded recently that the evidence that human health has been adversely affected as a result of exposure to EDCs is generally weak compared to sufficient evidence for some wildlife species. On the other hand, in addition to the reproductive effects, the neurobehavioral and immunological toxicities due to EDCs have become another focus of great concern. In order to cope with these scientific uncertainties and continuing concerns, epidemiological studies beefed up with proper study designs on the potential effects posed by EDCs should remain a high global priority.

Key words: endocrine disrupting chemicals, dioxins, epidemiology, health effects, risk assessment

Reprint requests to: Hiroto NAKADAIRA
Division of Social and Environmental Medicine
Department of Community Preventive Medicine
Niigata University Graduate School of Medical
and Dental Sciences
1-757 Asahimachi-dori,
Niigata 951-8510 Japan

別刷請求先: 〒951-8510 新潟市旭町通り1-757
新潟大学大学院社会・環境医学分野 中平浩人